令和７年度 研究計画

市川市立八幡小学校
研究主任

《学校教育目標》

人と人とをつなぐ

【や】やさしさと思いやりの心を大切にする子　【わ】わからないことをみつけ考えぬく子　【た】たくましく生きる心と体をもつ子

《研究主題》

進んで学ぶ子供の育成

～「学びのプロセス」の充実(駆動)～

１　研究主題設定の理由

(１)本校児童の実態(令和６年度全国学力学習状況調査の結果及び昨年度校内研究実態調査から)

習得〇、活用△

〇知識・技能面での習熟度が高い。

△「書くこと」は他の項目と比べて平均との差が小さいため課題があると考えられる。今後は一定の条件の中でまとめる力を伸ばしていく必要がある。

学ぶ意義△

〇課題を解決するために自分で考えて取り組んでいると思っている児童の割合が全国・県平均と比べて高い。

△国語科で学んだことが将来社会に出た時に役立つと思っている児童の割合が県平均と比べて低い。

△地域や社会をよりよくするために何かをしたいと思っている児童の割合が全国・県平均と比べて低い。

学びのプロセスに対するこどもの意識△

△前年度に引き続き、総合的な学習の時間に「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することができる」と思っている児童の割合は低く、探究的な学びの定着が不十分であることが伺えるため、学びのプロセスを充実させることが必要である。

(２)求められる教育（「小学校学習指導要領解説　総則編」より）

小学校学習指導要領解説総則編では、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等が挙げられている。(中略)

特に言葉を直接の学習対象とする国語科の果たす役割は大きいとされ、「情報活用能力」については、「将来の予測が難しい社会において、情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成が重要となる」とされている。また、「問題発見・解決能力」については、「物事の中から問題を見いだし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程を重視した深い学びの実現を図ることを通じて、各教科等のそれぞれの分野における問題の発見・解決に必要な力を身に付けられるようにするとともに、総合的な学習の時間における横断的・総合的な探究課題や、特別活動における集団や自己の生活上の課題に取り組むことなどを通じて、各教科等で身に付けた力が統合的に活用できるようにすることが重要である。

２　研究主題について

「進んで学ぶ」とは

「進んで学ぶ子」とは「自ら課題を設定し、豊かな体験活動を経験しながら、試行錯誤を繰り返して学ぶ子」であると考えており、これは学校教育目標にある「わからないことを見つけ考えぬく子」の姿の一つである。

そして、総合的な学習の時間を軸とした学びのプロセスを、子供たちが自らたどり学びを進めること＝駆動で、研究主題の達成を目指す。また、その姿を目指すためには、言語能力、情報活用能力、はもとより、国語科の低学年の目標に示されている順序立てて考える力や、「思考力、判断力、表現力等」の内容Ａ話すこと・聞くことで示されている資質・能力の定着は必要不可欠と考える。そのため、低学年が国語科の学習に取り組み、中学年以降、低学年で育んだ資質・能力を活用し、総合的な学習の時間に取り組むことで本校の目指す「進んで学ぶ」姿の実現を図ることができるはずである。

３　主題達成に向けて（今年度の研究の重点）

ゴールの明確化　通過点の具体化

これまでの３年間の成果として八幡小学校の多くの学級担任が学習のプロセスを意識しながら授業を行うことができるようになってきた。一方で子供たちは学びのプロセスを意識して学習を進められるかということに関しては上述したとおりである。その要因として目標が広く曖昧だったことや、教師側が目標を具体的にイメージできずゴールに十分にたどりつけなかったことなどがあげられる。そのために、今年度も引き続きゴール＝探求課題：全ての学習が終わった後に、なっているであろう児童の姿、発言、考えを明確にすること。そして、そのゴールに結びつくための通過点＝材とどのように出合わせ、どのような学習活動を行い、どのような課題意識を掴ませ、それらをどう解決していくのか、という一連の流れを具体的に学習計画に落とし込むことを、今年度の研究では重点的に考え研究を進めていきたい。

各教科での進んで学ぶ子像の構築

各教科・領域でも「進んで学ぶ姿」は見取ることができると考える。５月に控えている、合同訪問を活用し、各教科の進んで学ぶ子の姿を明らかにし、共有することで、それぞれの特徴が明らかになるとともに、その力をやわスタの学習の時間に活用することで双方にとってよい効果が得られると考える。

「学びのプロセスは、他教科でもいかせるものだ」ということ、を実践の中で確かめていきたい。

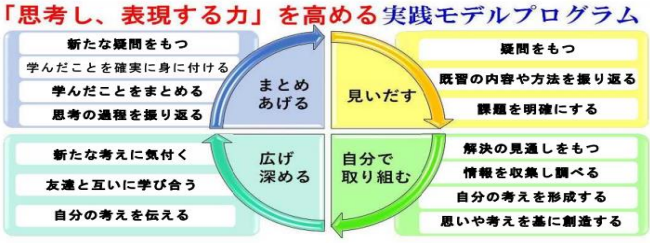
４　各教科の重点

（１）活動を支える素地の育成（すべての教育活動を通して）

- 言語能力の育成　　例）漢字・語彙の獲得、美しい日本語への意識、幅広い表現方法との出会い
- 情報活用能力の育成　　例）情報収集能力を伸ばすための図書館活用、ICT 機器の活用推進
- 問題発見・解決能力の育成　　例）知りたいと思わせる事象との出会い（共通体験）、子供と学習問題・まとめを作る習慣

（２）「学びのプロセス」（通過点）の具体化

国語科	各段階での「進んで学ぶ子供」の姿	総合的な学習の時間
・学習のゴールを教師と一緒に考える ・自分たちの力の付き具合から単元の学習計画を立てられる部分は立てる	①自ら課題を設定する 〇今できること できないこと できるようになりたいこと 〇学習計画の共有	・地域の素材を取り上げる ・実生活、社会との関わりを意識させる ・共通体験を設定する
・教材との出合いの中で、自分の考えをもたせる	②豊かな体験活動をしながら情報を収集する 〇教材への理解、課題解決 〇言語活動の深化（質を高める）	・アンケート、インタビュー、見学、体験等、ものや人、ことと関わらせることで自分の考えをもたせる
・言語活動を通して、自分の思いや考えを伝えさせる ・友達との交流の中で、思いや考えを広げさせる	③試行錯誤しながら学ぶ 〇考えの形成、再度の問い 〇意見交流による考えの再考	・思考ツールを使った情報整理の時間を設定する ・ペアやグループでの意見交換をさせる ・大人からの意見をもらう場を設定する
・学習を振り返らせることで、獲得した力を今後の活動に生かせるようにする	④学ぶことのよさに気付いたり、新たな学びにつなげたりする 〇今後の学習への汎用化 〇新たな問いをもつ（学びの自覚）	・手段や相手を選んで伝えさせる ・これからの自分たちの生活に生かせる意識付けをする（まとめさせる）

千葉県教育委員会からは「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善のための手立てとして「『思考し、表現する力』を高める実践モデルプログラム」が提示されている。

本校の「学びのプロセス」とはまさにこのものである。